

老舎はなぜ、自ら命を絶ったのか

周恩来の章



抗日戦初期の頃の周恩来

周恩来(1898-1976)は有能な政治家として世界的に知名度の高い人物で、今でも彼を評価する意見のほうが多い。だが、1924年の国共合作時に政治の世界に入ってから亡くなるまでの約50年間、一度も失脚することなく政治家としてあり続けたのだから、「並」の人物ではないことは容易に推測できる。

彼は若い頃に日本やフランスに留学し、その穏やかな微笑、柔らかな物腰に、彼と会った人々は男女の区別なくほとんどが彼に魅了された。

しかし、忘れてはならないのは、文革のときに彼は毛沢東を全面的に支持しつづけ、その被害を拡大させることに手を貸した共犯者であるということである。彼は毛沢東が起こした権力闘争で毛沢東の側につき、多くの「邪魔者」とされた人々の逮捕状に署名し、いろいろな方法で抹殺するのに協力した。

紅衛兵にリンチを受けた翌日、老舎は自らの命を絶った。周恩来がもし老舎の名前が批判者のリストに載せられていることを事前に知っていたら、彼を助けることができたろうか？ 答えは「否」である。

文学者は抗日宣伝用の道具だったのか？



左から三番目が老舍、順に周恩来、馮玉祥（1946年武漢）

1938年に文協が作られたのは国共合作の事業の一環としてであり、大々的に抗日を訴えるためのものだった。全国から声をかけられた文学者が武漢に集まってきた。これを指揮したのが共産党の周恩来と国民党の馮玉祥(1882-1948)である。中国共産党ニュースネットに**文協**に関する記事が掲載されている。書いたのは于志恭という人物である。

1937年7月7日に盧溝橋事変が勃発した。

中国共産党は国家と民族の利益のため、国民党と合同で日本軍に対抗する問題について話し合いを続けた。周恩来は中国共産党代表団を率いて“戦時中の臨時首都”である武漢に来た。抗日民族統一戦線の拡大と全民族の抗日戦促進のため、周恩来は国民政府軍事委員会副委員長馮玉祥と緊密に連絡を取り合った。当時私は馮玉祥の身边にあって日誌を記録する任務についており、彼らが話をしているのを見たり聞いたりする機会があった。

1938年2月14日、周恩来と馮玉祥の会談が武昌黄土坡千家街福音堂で行われた。我が党は「抗日救国十大綱領」を示し、馮玉祥の深い支持と賞賛を得た。

当時の情勢：日本侵略軍の主力はすでに徐州に近づいており、津浦路を通って武漢を奪う準備をし、投降派の活動が盛んになっていた。

このような情勢に直面し、「抗日救国十大綱領」の宣伝強化を前進させるために、全国から武漢に集まってきた文芸界の愛国人士を団結させ、抗日救国の活動に当たらせるため、周恩来と馮玉祥が「中華全国文芸界抗敵協会（**文協**）」を立ち上げる相談をした。周恩来は馮玉祥に支持を要請し、直ちに「文協」開会の場所等の問題が解決するに至った。

そして老舍と陽翰笙等の懸命の尽力により、**文協**は3月27日に漢口の商業会議所講堂で開幕した。（原文A）

1938年3月27日に設立された**文協**には名誉主席構成員としてフランス人作家ロマン・ロラン(1)やアメリカ人ジャーナリストのアグネス・スメドレー(2)が名を連ねている。

設立の大会後に催された普海春大飯店(現揚子江酒店)の宴席には馮玉祥の招待で多数の文壇関係者が集まり、抗日戦を共に戦おうという気運が一気に高まった。

周恩来は5月中旬に開かれた**文協**の第二回理事会にも招待された。老舎はそのあとの会務報告書にこのときのことを描写している。

周恩来先生の話される番がきたとき、先生はこう言われた。「文学者たちと一緒に食事ができて楽しい、いや、食事ができるだけで楽しいのではなく、みんながこれほど親密になりこれほど純真に一致協力して仕事ができることが楽しいのです。みんなが文章を書けるように、会がさらに発展するように、**文協**に資金を得る方法を講じる必要があります。」

最後に(目に涙を浮かべて)言われた。「これで失礼しなければなりません。今晚10時に父が漢口に到着するのです。(拍手)。残酷な敵は我々に損害を与え不幸にしました。残酷な敵は私の父を南方に追いやりました。生死離合はすべて残酷な敵の侵略から生み出されたものであり、生死離合は我々の団結力を強くするものです! ではこれにて失礼!(拍手で送る)(原文B)

老舎が**文協**成立と運営に果たした役割は大きい。老舎がいなかったら**文協**もなかっただろうと言われているが、大げさな表現ではないだろう。**文協**から給料をもらうわけでもなく、老舎は無償で**文協**の運営に奔走したのだ。

1940年には**文協**主導で原稿料値上げ、出版方改正、救済基金設置などを要求した「作家の生活保障」運動が起こっていることから、**文協**に関わっていた作家たちの生活が困窮していたことがうかがえる。周恩来たち軍の指導者は文人の純粋な愛国心を頼りとして(あるいは利用して)、抗日宣伝を続けたのだ。

1945年8月、第二次大戦が終わり抗日戦線に勝利したあと、**文協**にいた作家たちはそれぞれの場所に戻っていった。老舎は1946年1月、アメリカ政府から1年間の文化講師としての招聘を受け渡米した。しかし予定を延ばして約3年間滞在した。

周恩来の二つの顔

老舎は周恩来の人柄に魅了され彼を信頼していた。だからこそ1949年に彼からの帰国を促す手紙を受け取ると、それにこたえたのだ。その前に趙清閣から来た手紙が、実は周恩来が陽翰笙を通じて彼女に書かせたものだということを、彼は知る由もなかった。

老舎は帰国してから国家のために身を粉にして働いた。すべて共産党と毛沢東、周恩来の期待にこたえるためである。

右の写真は1960年の春に撮られたもの。「毛沢東のおかげで中国はよくなった」と本気で信じていた老舎は、満面に笑みをたたえ、実に嬉しそうである。



1966年8月、天安門の楼上で紅衛兵に手を振る周恩来と毛沢東。
右側の人物は当時の副主席林彪(1909-1971)。

紅衛兵から殴打されたその日、老舎は「私は反革命的な人間ではない。私が書いたのはすべて新社会と中国共産党を賛美する作品ばかりだ」と言った。すると彼らはあざ笑った。

「お前が共産党を讃える歌を歌ったのなら、どうして共産党はお前を入党させなかったのだ？」

彼らが言ったとおり、老舎は入党を申請したが周恩来は彼を入党させなかった。それはなぜか。

1959年のある日、周恩来が老舎の家にやってきた。そして彼に言った。

「老舎先生、あなたが共産党に入党を申請されたのは知っています。それはとても進歩的な行動で私たちは歓迎しています。しかし、このことについてあなたと相談したいのですが、帝国主義者と反動派たちが私達の新中国を孤立させようとし、禁輸措置、封鎖政策をとっている現状では、あなたにはしばらく共産党の外にいてもらうほうがいいのではないかと、私たちは考えているのです。」

何かがあったときに、私たち共産党員が何か言うのはあまりよくはありませんが、あなたのような有名な方が言えば大きな効力があります。そのほうが党にとって大きな貢献をすることになるとは思われませんか？」

老舎は周恩来の話に全面的に賛成して言った。「私のことをそこまで考えてくださってありがとうございます。党の言うことに従います。周総理の言うとおりにいたします。入党はしませんが私は永遠に党と共に歩みます！」（原文 C）



1962年2月春節の宴席での老舎と周恩来

周恩来が老舎の名声を利用しようとしていたのがよくわかる。だが老舎のほうは、彼のことばを文字通りに受け取り、周恩来に自分が評価されたのだと思って感謝し、彼への信頼はさらに深まっていった。

政府にとっては、アメリカやヨーロッパからやってくる政治家やジャーナリストに、共産党員ではない世界的に有名な作家が、「新中国はこんなにすばらしい」と宣伝してくれることが必要だったのだ。

老舎と同じように妻子を置いて抗日戦線に参加し、**文協**設立に名を連ねた人物に郭沫若がいる。1938年1月、郭沫若は日本人の妻と5人の子を残して中国に帰国した。このとき彼は46歳だったが、上海で自分より20歳以上年下の左翼の女優と一緒にあった。

この、すでに有名な文化人となっていた郭沫若に周恩来は自ら電話をかけ、**文協**設立への協力を要請した。彼は喜んで周恩来の要請に応じた。そしてやるからには共産党に入党し、張り切って仕事をしたいと言ったが、周恩来はこのときも、秘密裡に共産党員として働いてくれるほうがいと勧め、郭沫若もそれに従ったのである。だが、老舎と郭沫若のその後の人生には大きな違いが出ている。

1949年に中華人民共和国ができると郭沫若は積極的に政治の世界に足を踏み入れ、1958年に共産党入党を果たした。反右派闘争が始まると毛沢東に迎合した作品を書き、文革が始まると率先して「これまで自分が書いたものは何の価値もない」と自己批判をし、「知識人の思想改造が成功した例」として毛沢東の庇護を受けた。

共産党を讃える詩を書き、四人組が逮捕されると今度は彼らを批判する詩を発表した。みごとなまでの風見鶏の生き方のおかげで、彼は86歳の天寿を全うすることができた。

しかし老舎には、彼のような生き方はできなかった。共産党万歳を唱えながら、心の中にはいつも書きたいもの自由に書きたいという欲求を抱えながら生きていた。何をどう書けばいいのか、常に苦悩していた。

老舎が悲劇的な最期を迎えたとき、周恩来は彼を助けることはしなかった。老舎が亡くなって一か月後の国慶節のとき、周恩来は当時の北京副市長の王昆仑に、「胡絮青の様子を見にいてくれないか」と頼んだ。だが王昆仑は老舎に関わりを持つのは危険だと考えたので、「側近の方に頼まれたほうがいいのではないですか」と断った。

その王昆仑も二年後に捕らえられ、七年間獄中生活を送ることになった。釈放されてから彼は胡絮青を訪ねたが、そのとき、周恩来が一度も彼女のもとを訪れていないことを知った。周恩来は自分の身に火の粉が降りかかってくることを避けたのだ。

